慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	一九五四年長江大洪水と三峡ダム計画
Sub Title	The 1954 Yangtze river floods and the Three Gorges dam project
Author	林, 秀光(Lin, Xiuguang)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2017
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.90, No.2 (2017. 2) ,p.1- 29
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20170228-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一九五四年長江大洪水と三峡ダム計画

林　秀光

はじめに
第一節　国家プロジェクトとして動き出す
　1　長江大洪水とソ連人専門家の招聘
　2　林一山と毛沢東らの面会
第二節　総合開発ビジョンの策定と三峡ダム計画
　1　長江流域規劃弁公室の設立
　2　ソ連人専門家の異議と周恩来の賛同
　3　最高指導層の意向と林一山論文の意図
第三節　水力発電部門からの反論
　1　李鋭と林一山の正面衝突
　2　李鋭の最高指導層へのアプローチと挫折
　3　ソ連人専門家の影響力
第四節　毛沢東の詩文「水調歌頭・遊泳」の役割
おわりに

はじめに

三峡ダムの歴史は長江の洪水を抜きにして語れない。そのなかでも、一九五四年の長江大洪水は決定的なものであった。この大洪水を機に最高指導部内における危機管理意識が高まり、長江流域総合開発ビジョン（中国語では、「規劃」）の策定がもち上がった。それまで、長江水利委員会（以下、長委会）内部で進められてきた三峡ダムの研究が、ソ連人専門家の招聘を経て国家プロジェクトとして実現する可能性も出てきたのである。とはいえ、そのためには次の政策プロセスを踏まえなければならない。すなわち、まず三峡ダムを長江流域の総合開発ビジョンに組み入れることである。次に、支流のダムと比較し重要度に応じた着工順を決定すること。そして具体的な設計の段階に進むことである。

別稿で詳述したように、水力発電総局（以下、水電総局）の提起した長江主流での三峡ダムの建設よりも、支流を先に開発する「先に支流、のちに主流」案は早い段階で陳雲の承認を得ていた(1)。しかし、大洪水を契機に動き出した総合開発ビジョンの策定にあたって、三峡ダムをその核心に据えるか否かが問題になった。というのも、長委会は三峡ダムが千年に一度の洪水でも対応でき、長江中流の洪水防除の要になると主張し、それを中心に据えた「以三峡工程為主体」（「三峡ダムを長江開発の中心に据える」）の案に固執していたためである(2)。

従来の研究では、この論点から広がった対立の背景にある長委会と水電総局の動き、トップリーダーやソ連人専門家のかかわりと役割について、利用できる資料が限られていたため、明瞭な説明がなされたとは言い難い(3)。本稿は、五四年の長江大洪水を契機に浮上した「以三峡工程為主体」をめぐる両部門の対立を分析し、その攻防プロセスを通して三峡ダム計画を前進させる力の所在を考察する。

第一節　国家プロジェクトとして動き出す

1　長江大洪水とソ連人専門家の招聘

三峡ダム計画をめぐる動きは、一九五四年夏、長江全流域で起こった大洪水によって加速化した。この大洪水は、主な増水期である七月と八月の二か月間にわたり、長江主流と支流の洪水総量が四五八七億立方メートルに達し、堤防の排水能力を一〇三二億立法メートルも超えるという、近百年来の実測水文記録中最大のものであった。被害は、被災者約二〇〇〇万人、死者約三万人、加えて約三〇〇万ヘクタールの耕地が水没するという甚大なものである[4]。上流からの洪水に、中流で見舞われた集中豪雨が加わり、二年前に補強工事が完成したばかりの荊江堤防の安全が脅かされる事態となった[5]。

従来、中国政府がソ連政府に要請した水利と水電建設の援助は、黄河と漢江（長江の支流）に限られていた[6]。洪水をきっかけに、中央政府は長江流域の総合開発ビジョンに着手するよう指示し、ソ連に技術援助を求めた。

同年一〇月一二日、「中国政府請蘇聯政府増加設計和幇助建設某些企業的備忘録」が出され、ソ連に対して追加の技術援助を求めた。そのなかで、新たに要請する六項目の技術援助の第一項目に長江への援助があげられている。「中国政府はソ連政府に対して、揚子江（長江）の水利と水力資源の利用に関する問題を総合的に解決するために、専門家を中国に派遣し実地調査を行うよう要請する」というものである[7]。

ソ連閣僚会議は一一月二五日において「関於援助中華人民共和国建設工業企業、向中国派蘇聯専家和関於另外接受中国工人来蘇聯企業学習的決議」を決定し、そのなかで、「電站部が一九五五年第一四半期中に中国に一三人の専門家を派遣する。派遣期限は一年、中国の長江水利資源の測量調査と試算を行う」と定めた[8]。

2　林一山と毛沢東らの面会

五四年一一月二六日、毛沢東、周恩来と劉少奇は林一山と面会した[9]。実は、同月三日から二四日まで毛沢東らは広州で第一次五か年計画の修正案について討議を行っており、北京への帰途にあった[10]。

林一山の回顧によると、彼は夕方に電話連絡をうけ漢口駅で専用列車に乗り込み、夜一〇時過ぎまで毛沢東らに会っていた。毛沢東は握手を交わすや三峡ダムに話題を変え、林一山にその技術問題や地質問題について質問した。林一山は、「ソ連で竣工あるいは建設中のダムは、その技術や規模が米国のそれに類似しており、大差がない。米国人サーベジが三峡ダムを造れるなら、どうしてソ連人専門家にできないことがあろうか。たとえソ連人専門家の助けがなくても、丹江口ダム（漢江で当時計画中のダム――筆者）で経験を積めば、数年後には中国人専門家のみでも建設できる」と答えた[11]。

とはいえ、そもそもこの時点で三峡ダム計画は具体的な研究がなされておらず、林一山が数時間の面会で詳細な報告ができたとは考えられない。しかし、林一山のこうした楽観的な意気込みは歓迎されたことであろう。別稿で詳述するように、毛沢東は後にも林一山と数回にわたって面会しているが、彼の革命幹部としての前向きで熱意あふれる姿勢が評価されたものと思われる。

林一山は面会の数日後に北京で李葆華（水利部副部長兼党委員会書記）に報告した。その際、李葆華はソ連閣僚会議議長ブルガーニン（布尔加寧）から毛主席宛の返答をみせた。それには、第一陣の派遣人員をただちに中国に向かわせるとあった。林一山はその迅速な反応に驚いたと振り返る[12]。

第二節　総合開発ビジョンの策定と三峡ダム計画

1　長江流域規劃弁公室の設立

ソ連人専門家の到着に合わせて、長委会が国務院直属の長江流域規劃弁公室（以下、長弁）へと格上げされた。五六年三月六日、国務院第七弁公室（以下、七弁）は「五六」国七人字第三号文「国務院第七弁公室同意国務院流域規劃委員会長江弁公室組織編制意見」を公布したが、七月五日に再び「五六」国七水字第一五号文件で水利部に指示した。その内容とはつまり、「長江流域規劃委員会の成立を待たず、水利部による長江流域規劃弁公室の設立に同意する」というものである。そして、一〇月二二日、水利部が七弁の指示とともに、「五六」水庁秘馮字第三二七号文「関於成立長江流域規劃弁公室已経上報批准的通知」を公布した。長弁の成立をうけて、翌月一五日、水利部は「長江流域規劃弁公室」の印章を授けている[13]。それを以て、長弁は国務院の直属機構でありながら、業務上水利部の下部組織としてスタートを切った。

このように、長弁の成立にあたっては七弁が水利部門の主管としてかかわっている。別稿で論じたように、その主任である鄧子恢が林一山とともに三峡ダムを長委会のタスクに据えた経緯から、彼がなんらかの形で影響力を及ぼしたと考えられよう[14]。

長弁には、燃料工業部、交通部、地質部などの関連部門からも人員が派遣された。主任は林一山が続投し、党委員会書記李廷序と副主任の一人任士舜は長委会の人間であったが、燃料工業部の李善民と交通部の張文昺も副主任に指名された。また、技術畑では国民党時代からの技術者が目立った。長委会から派遣された総工程師李鎮南、副工程師周尚、楊賢溢、邢維堂、楊績昭ら、および燃料工業部から派遣された副工程師陸欽侃と胡慎思、章沖はそれにあたる。地質部より派遣された地質勘探隊は胡海濤が副総工程師を務めた[15]。

長弁は国務院の直属組織として急速に拡大された。五六年に職員三〇〇〇人が新たに増加されたが、国務院の各部門と委員会または研究機関などの関連組織からも一〇〇〇人あまりが支援に派遣された[16]。同じ時期に長弁内

に党組織「中共長江流域規劃弁公室委員会」が置かれ、第一書記に林一山、第二書記に李廷序が任命された。前述の長弁の人員構成と考え合わせるに、その前身である長委会の強い影響力がうかがえよう。長弁は八八年に廃止され長委会に戻るが、林一山の統率のもと、三峡ダムを推進する水利部門の「牙城」として、その役割は終始変わらなかった。

2　ソ連人専門家の異議と周恩来の賛同

五五年六月にソ連人専門家グループが長委会に到着し、七月にはグループ長ドミトリエフスキー（徳米特里也夫斯基）も来華した[17]。専門家グループは、ドミトリエフスキーと副グループ長バクシェエフ（巴柯舎也夫）をはじめ、水工、水文計算、水利計算、総合経済、エネルギー経済、水力機械、電気設備、ダム経済と水上運輸の専門家によって構成された[18]。ソ連人専門家は中ソ対立を契機に六〇年一〇月までに全員が撤退したが、これを皮切りに、長委会には総勢五五名の専門家と四〇名あまりの航空測量人員が派遣された[19]。

専門家との連絡係に李鎮南が指名されたが、彼が総合開発ビジョンに関する報告書の作成に資料が不足していると相談したところ、専門家からまずはガイドラインとなる要点報告書の提出をアドバイスされた[20]。それをうけて、要点報告書の作成が長弁の課題となった。

同年一〇月、李葆華と林一山が引率し、国家計画委員会、水利部、地質部、燃料工業部（正しくは電力工業部――筆者）、交通部および関連部門の関係者とソ連人専門家で一四三名からなる「長江査勘団」が組織された[21]。査勘団は総合、灌漑、水上運輸と地質測量という四つのグループに分けられ、漢口より上流の長江主流および支流の主なダムサイトを測量調査した。

ソ連人専門家の意見は、重慶より上流四〇キロメートルの猫児峡ダムを基幹ダムにし、支流の嘉陵江と岷江に

それぞれ温塘峡ダムと偏窩子ダムを造りそれを補助する、というものであった。彼らが三峡ダムを基幹ダムとしなかったのには理由があった。三峡ダムは規模と投資が莫大なことに加え、当時の中国の産業規模ではその電力を消費しきれず、合理性に欠ける、というのが彼らの主張である[22]。

他方李鎮南らは、ソ連人専門家が長江中下流の洪水防除の緊急性について認識不足であり、水力発電の専門家である彼らは思考が発電に片寄っていると考えた。そのため、洪水防除は総合開発ビジョンに不可欠の重要課題であると反論し、四川省の美田を多く水没させる猫児峡ダムは、地方政府の同意を取り付けられない可能性があるとも主張した[23]。

成都に到着した一行が、四川省党委員会に視察の状況を報告し意見を求めたところ、党委員会は、ソ連人専門家の提案する三つのダムは水没地域が広大で、多くの美田がそこに含まれることを理由に反対を表明し、今後研究を続けないように求めた[24]。

このような地方政府の要求が水利部門の立場を強くしたものと思われる。李鎮南らは三峡ダムを中心とする主張を崩さず、視察中ソ連人専門家との間で激しく議論が交わされた。この際、両者の間に合意が得られなかったことは李鎮南も認めている[25]。

それをうけて、周恩来の主宰する報告会が同年一二月末に北京で開かれた。周恩来は三峡ダムの「対上可以調蓄、対下可以補償（「上流の洪水を調整し、下流を守ることができる」）」という独特の役割から、三峡ダムを総合開発ビジョンの中心に据える主張に同意した[26]。

周恩来の賛同は河川への危機意識が背景にあった。報告会に先立つ同年九月、周恩来は第一回全国人民代表大会第一次会議で行った「政府工作報告」のなかで、「今後はかならず積極的に流域の総合開発ビジョンの策定から着手し、対症療法と根本的な解決法、洪水後の排水と水害予防をともに重要視する方針を採る」と表明してい

る。[27] 五四年の大洪水は、周恩来をはじめ、最高指導層に与えたインパクトが大きく、彼らの危機管理意識を喚起したと思われる。長江における洪水防除は従来の対症療法に加え、問題を根本解決する方向に動いた。

3　最高指導層の意向と林一山論文の意図

水利部門が三峡ダムを長江開発の中心に据えるにあたり、周恩来の賛同は極めて重要な意味をもっていた。後年三峡ダム推進派は、周恩来の賛同によって「三峡ダムを長江流域総合開発ビジョンの中心にする研究は一応確定した」と認めている。[28]

実は、周恩来が賛同を示す前後には最高指導層における一連の動きが存在する。五五年一二月一六日、毛沢東の主宰する中共中央政治局拡大会議において、李葆華が長江流域総合開発ビジョンについて報告した。[29] 前述したように、周恩来が長委会の提案に賛同を示したのはその月末である。また、翌年一月一一日に、周恩来は再び水利部などの部門責任者とこの問題について討論している。[30] こうした一連の動きは、林一山ら水利部門を大きく勇気づけたと思われる。

林一山は水利部の機関誌『中国水利』五六年第五期と第六期に、三峡ダムを長江総合開発ビジョンの中心に据えると初めて公表した。[31]「関於長江流域規劃若干問題的商討」と題するこの論文のなかで、林一山は、「三峡ダムの最たる役割は洪水防除であり、正常貯水位が二三五メートルの場合、千年に一度の洪水も防げることが明らかである。したがって長江中流の水害問題を根本的に解決できる」と述べている。[32]

この論文が執筆されたのは、ソ連人専門家が到着して約半年の時期であり、その間に十分な研究が蓄積されたとは言い難い。また、李鋭が指摘したように、林一山は同年二月に行われた現地視察でのソ連人専門家の意見をこの論文に取り上げなかった。[33] 林一山がこのタイミングで自らの主張を公表した背景には、前述した最高指導層

の動きがあったと思われる。

さらに、論文は紙面の大半を長江の洪水問題と三峡ダムの役割に割いていた。これは、水電部門の異議申立てに対する牽制と思われる。李鋭が指摘したように、「この論文は二万四〇〇〇字あったにもかかわらず、発電に関しては九〇〇字ぐらいしか当てられていない」[34]。この事実は、林一山をはじめ、総工程師李鎮南らの三峡ダムの発電機能に対する無関心を示すものではなく、あえてその重要性を強調しないという戦略的な意図がうかがえる。というのも、李鎮南は五四年四月に三峡地域の実地調査の際に、すでに発電を視野に入れており、ダムサイトの選定は発電所の配置を考慮して行うべきだと主張していた[35]。

長江の治水を担う長委会の意図が、水力発電よりも洪水防除の役割を前面に打ち出すことで、三峡ダム立案の権限を自らの部門に留めることにあるのは明白といえよう。林一山と李鋭の論争は、三峡ダムの主な役割を「洪水防除」とするか「水力発電」とするかで、両者の所属する部門の政策立案の力点が異なることを浮き彫りにした。

第三節　水力発電部門からの反論

1　李鋭と林一山の正面衝突

前述した通り、三峡ダムを長江開発の中心に据えるという長委会の主張は周恩来によって認められた。しかし、それには水電部門との間に合意を得られていなかったことが、その直後に表面化した。

一九五六年一月に「全国水力与水利資源普査会議」が開かれ、水利部副部長銭正英も出席していた。李鋭は大会で電力工業部長助理として発言し、おそらく初めて公の場で三峡ダムの問題について意見を表明した。彼は三

峡ダムに明言しないものの、長江における林一山ら水利部門の動きに釘を刺している。[36]

「長江はわが国の第一大河であり、（中略）、この河川の治水と開発は、中国の半分ないし全国の国民経済の各部門に影響を与える。したがって、黄河と同様に扱う必要がある。まず、河川資源の総合利用を図る開発ビジョンの策定をしっかりやらなければならない。具体的な自然条件を鑑み、技術的かつ経済的に緻密な分析と論証を行って初めて第一期工事を決めることができる。このステップは絶対にスキップしてはならない。これは不動の原則である。総合開発ビジョンを通さず、一つのプロジェクトに限定して事を進め、設計を行おうとするのは合理的ではない。したがって、われわれは長江当面の問題は総合開発ビジョン要点報告の編制であり、それに専念して他の不必要な仕事をやるべきではないと考える」。[37]

この発言から水電部門の立場がうかがえよう。一つは、長江の総合開発ビジョンの策定に水電部門の関与を求めるもの、いま一つは、総合開発ビジョン策定の未完段階において、長委会は三峡ダムの研究に着手すべきではないと牽制するものである。

また同年二月、ソ連から水電設計院総工程師ヴァシレンコ（瓦西連柯）と、クイビシェフ水力発電所総工程師マルィシェフ（馬洛歇夫）が訪中していた。[38]彼らの現地視察には、林一山と李鋭を筆頭に両部門の関係者が同行した。視察に先立ち二月二日に報告会が行われたが、林一山と李鋭は正面を切って対立した。[39]

まず、林一山と李鎮南が長江流域の総合開発ビジョンについて、以下の点を報告した。第一に、流域の総合開発ビジョンは洪水防除を中心とし、排水工事も並行して行い、三峡ダムを洪水防除の要とする。第二に、三峡ダムは洪水防除のみならず、発電、航路の確保と灌漑においても巨大な経済的価値を有する。第三に、漢江から黄河と淮河に引水する偉大な計画と合わせて、長江主流と支流から漢江に引水する必要がある。

それについて、李鋭は、「少し前に北京で三峡ダムは七、八年のうちに完成できるとのうわさがあったが、そ

んなに早くはできないだろう」と釘を刺した上で、次のように述べた。

第一に、中央の方針をいかに理解するか。中共中央政治局が提起した『一九五六～一九六七年全国農業発展綱要（草案）』において、水利建設に求められているのは七年から一二年のうちに、基本的な水害と干ばつを消滅させることである。したがって、六七年までに根本的に長江の非常洪水（例えば、千年に一度の洪水）を解決することは、事実上不可能といえよう。

第二に、洪水対策をいかに講じるか。長江の洪水問題は国家の建設方針と現在の技術水準に基づき、段階を踏んで対策をとり、徐々に解決すべきである。洪水対策の基準は、国家全体の事業の進捗状況や国民経済各部門の状況に応じて、漸次的に高めていくものであり、一気に解決を図るものではない。

第三に、電力開発との関連について。「一五年電力長期計画」では、長江流域の水力発電は、丹江口ダムと沅水にある五強渓ダムが供給する予定になっている。三峡ダムは巨大かつ複雑であることを考慮して、第三次五か年計画に組み入れるべきではない。

第四に、三峡ダム自身の問題について。三峡ダムの工事と施工規模は現在の世界的な技術水準を大きく超えており、地質問題も非常に複雑で、十分に時間をかけて研究する必要がある。また、三峡ダムの水没損失について、長弁の資料によれば、正常貯水位が二三〇メートルの場合、立ち退き住民が一四〇万人に達するとあるが、これは極めて深刻な事態である。加えて、重慶市は西南地域の重鎮であり、その大部分が水没してしまうのであれば、なおさら慎重に考慮する必要がある。

第五に、漢江から黄河への引水について。黄河自体の水量で灌漑可能な耕地面積は七・七四億平方キロメートルである。黄河の総合開発ビジョンでは、六七年までに三億平方キロメートルの灌漑を行う計画であったが、現在すでに四・三四億平方キロメートルを達成している。現状で黄河の水量は余っており、漢江からの引水は先の

ことである。

第六に、当面の政策課題について。五六年にひとまず長江総合開発ビジョンの要点報告を提出し、その後流域の計画と第一期工事の設計を行うというソ連人専門家クループ長（ドミトリエフスキーを指す――筆者）の意見に完全に賛同する。当面カギとなる作業は現場の測量調査であり、とくに地質調査が不十分であるため、航空測量調査の責務は非常に大きい。総合開発ビジョン要点報告の作成は、主流、支流と湖にわたり、経済、技術と投資などの条件を総合して考慮すべきである。

このように、二月二日の報告会で戦わされた両部門の主張は、結局のところ半世紀にわたって、李鋭と林一山が代弁する形で続けられた。両者の意見は平行線を辿ったまま、翌日から一二日まで、二人はソ連人専門家とともに長江上流の視察に同行した(40)。

李鋭は、道中林一山とほとんど会話を交わさなかったと回顧している(41)。この気まずさからも、両者が激しく議論を戦わせた様子がうかがえよう。一方、林一山をはじめ三峡ダム推進派による、この二月の視察や激論についての言及は見当たらない(42)。当時、強い抵抗にあった林一山らの落胆ぶりが伝わるエピソードであるといえよう。

同月一六日に、長委会でこの実地調査を総括する会議が行われ、李鋭は水電部門の技術者張昌齢、陸欽侃、胡慎思、章沖とともに「査勘三峡後的幾点意見」を書面意見として提出している(43)。

同年九月、李鋭は林一山論文をうけて、水電部門の機関誌『水力発電』特集号で反論を行った。反論の内容は主として二月の現地視察時の議論を整理し、それまでの水電部門の立場を再確認するものであった。李鋭は「林一山同志がたしかに三峡ダムを以て長江の千年に一度の洪水問題を解決しようとする、一度苦労すれば後は末永く楽ができるという考えをもっている」と指摘した(44)。

この特集号に寄稿した李鋭のほか、陸欽侃、王伊復、陳望祥、張昌齢、顧文書、胡福良の全員が「留用人員」

であった。民国時代に陸欽侃と王伊復は三峡ダム研究のために米国に派遣され、張昌齢は中国で三峡ダムの実地調査を統括し現場を指揮した経験をもつ[45]。また彼ら全員が水電部門の人間であったことに加え、その後も水電系統の研究者らが寄稿し、三峡ダムをめぐる両部門の対立をより鮮明な形にした[46]。

2　李鋭の最高指導層へのアプローチと挫折

〈表1：李鋭のアプローチと挫折〉で示したように、李鋭は五五年末から五六年にかけて、繰り返し最高指導層にアプローチし、三峡ダム計画をめぐる水電部門の意見を表明した。それは、水利部門が七、八年のうちに三峡ダムを完成させると流言したことへの李鋭らの焦りや懸念を如実に語っている。とくに、異論に対する長弁の態度には強く不満を抱いていた。李鋭は「長江総合開発ビジョンの策定には国家の各部門から人員が集まっており、いかに異なる意見を吸収するかがカギとなる。とくに少数意見にはもっと注意を払う必要がある。しかし、現場ではこの一年来、策定を指揮するリーダーは異論を非常に恐れている。論争が「考えの不一致をもたらす」とし、三峡計画が「中央の指示」であり、「専門家が支持している」としばしば明言し、反対意見の封じ込めを図ろうとする」と苦言を呈した[47]。しかし、それらのアプローチは上司や周恩来に抑えられ、毛沢東あるいは一般大衆の目に届くことはなかった。

とはいえ、国務院副総理級の李富春や薄一波などは李鋭に賛同していた[48]。それゆえ、別稿で詳述するように、五八年一月に広西チワン族自治区南寧市で開かれた中共中央政治局拡大会議で、薄一波が毛沢東に李鋭の存在を告げたことで、李鋭と林一山は南寧市に呼ばれ、最高指導層の前で報告することになった。この会議を機に三峡ダムの歴史は大きな転換点を迎えた。

〈表 1：李鋭のアプローチと挫折〉

時期	対象・方法	内容	反応
1955年末か56年初め	周恩来、陳雲、鄧小平、李富春、薄一波、李葆華、林一山らへの報告書	「関於長江防洪方案和三峡工程的意見」	
56年あるいは57年（注①）	国務院会議での発言	三峡ダム賛成の声が圧倒的に多い中、異なる意見を述べる	周恩来は「困難だと言う人が一人いる。よかろう」と李鋭を睨みつける
56年3月末作成、4月1日付けで発表	毛沢東と劉少奇への報告書	「如何加速水電站建設」：水利と水電部門の軋轢に言及、三峡ダムは7、8年のうちに完成するとの水利部の主張には同意できないと明言	部門内の矛盾が暴露されるのを嫌い、上司王林が毛沢東と劉少奇に提出せずに止める
56年7月28日	上司劉瀾波経由周恩来と毛沢東への報告書	「関於長江三峡問題的意見」：周恩来に面会を求める。長弁に派遣されたソ連人専門家が林一山らのやり方に困惑。また、地質専門の大学生が長委会に多く配属されたため、水電部門に支障発生と報告	毛沢東の耳には届かなかったと李鋭は分析
56年9月	中央と国務院指導者にアピール	水電総局の内部雑誌『水電建設参考資料』に「関於長江規劃意見特輯」の特集を組む：1956年2月の現地視察の状況やソ連人専門家の意見紹介	
56年9月	『人民日報』投稿	「略談三峡問題」	公開論争には周恩来が不賛成のため、掲載見送り（注②）
56年11月	上記『人民日報』の投稿文を書き直して機関誌『水力発電』に投稿	「克服主観主義才能做好長江規劃工作―学習『八大』文件筆記」（注③）：国民経済のバランスを考慮した三峡ダム計画を、と主張。林一山らの反対意見を封じ込めるやり方に苦言	

出典：李鋭『「大躍進」親歴記』3～6 頁、および報告書と書簡の内容をまとめたものである。「如何加速水電站建設」の全文は、『李鋭往事雑憶』257 ～ 260 頁に所収されている。また、「関於長江三峡問題的意見」は『李鋭文集』第 11 巻、137 ～ 139 頁に所収されている。「略談三峡問題」は『李鋭往事雑憶』244 ～ 250 頁、『李鋭文集』第 11 巻、184 ～ 190 頁に所収されている。

注①李鋭『懐念廿篇』42、80 頁、三聯書店、1987 年。李鋭『論三峡工程』 2 頁、湖南科学技術出版社、1985 年。

注②李鋭に周恩来の意向を教えたのは『人民日報』副総編集長王揖であった。『李鋭往事雑憶』241 頁。

注③李鋭は当時「陳牧天」という名前で発表したと認めている。『論三峡工程』62 ～ 74 頁。

3　ソ連人専門家の影響力

実は、前述した五六年二月の視察後に、ソ連人専門家ヴァシレンコとマルィシェフが二三日に、国務院に対して「向周総理滙報要点」を提出している。そのなかで、彼らは「もし三峡ダムで問題が生じたら、長江は収拾がつかなくなるであろう」との厳しい意見を述べていた[49]。しかし、こうしたソ連人専門家の意見が周恩来に強い影響を与えなかったことは、李鋭のアプローチへの対処からもうかがえよう。

周恩来は翌年八月二〇日、北戴河で開かれた国務院常務会議において、「三峡ダムの理想は放棄してはならないが、それは長期計画である。具体的方案はまだ検討する余地がある。二〇世紀にできないとしても、いくらなんでも二一世紀にはできるだろう」と発言した[50]。

さらに、同年一二月三日に水力発電の展示会では、「中国五億四千万キロワットの水力資源の充分な利用と長江三峡ダムの建設という遠大な目標の実現に奮闘する」との題辞を書き、三峡ダムへの意欲をみせている[51]。

実は、北京で開かれたこの展示会は、李鋭の肝いりで水電総局が主宰し水力開発の成果をアピールするためのものであった。好評を得て、毛沢東と劉少奇以外中央の党と政府部門の幹部一〇〇人以上が来場し、一般市民の来場者も三〇万人を超え大変な賑わいをみせたと李鋭は回顧している[52]。周恩来は李鋭ら水電部門の立場を熟知していたことを考えると、李鋭がこの題辞を苦々しく思ったことであろうことは察するにあまりある。

一方、李鋭はソ連人専門家との接触のなかで、多くの影響をうけたように思われる。別稿でも述べたように、彼は五四年末に三か月にわたる訪ソ中に、河川の総合利用という方法論を学んだ。また、この滞在中に三峡ダムについて打診をうけた際にもソ連人専門家の意見を報告した[53]。

李鋭は五五年一〇月六日、ドミトリエフスキーと長江開発について意見交換している。また、五六年二月の長江視察中に、彼は単独でヴァシレンコと四回にわたって会談し、長江の総合開発ビジョンや三峡ダムについて意

見聴取した。ヴァシレンコは、「正しい洪水防除の基準を定めるべきで、さもなければその対策も正しく定めることができない」としたうえで、三峡ダムについて、「可能であれば、一番大きいダムは造らない方がよい。諺にもあるように、一番大きなもののために惑わされてはいけないし、一度にたくさんほおばってもよく噛めない。充分な資料が必要になる。想像を熱く語っても他人は説得されず、勇猛果敢に胸を叩くだけでは問題は解決しない。三峡ダムに固執してはいけない」と語った(54)。

実は、李鋭は同年七月二八日に劉瀾波宛に出した書簡（毛沢東と周恩来に転送してもらうため）のなかで、次のように記している。「長弁に派遣されたソ連人専門家に対して、林一山は三峡ダムが中央と毛主席の既定方針であることを繰り返し強調した。当初、三峡ダムに注意を向けなかったソ連人専門家グループ長ドミトリエフスキーは、『三峡問題における中国同志からのプレッシャーが大きすぎる』と漏らしている。当然ながら、ソ連国内においてもその問題については相当の注意が払われた。電站部のなかで設立された長江委員会は、権威ある専門家によって構成され、長弁に派遣された専門家の監督と指導を行うものである。その責任者である水電設計院総工程師ヴァシレンコは、二月に来華し、周総理にも報告した(55)」。

この書簡からは、長弁におけるソ連人専門家の難しい立場と、ソ連側が三峡ダム実現を望む中国側の事情を承知し、それなりの対応をとっていた事実をみることができる。にもかかわらず、前述したように、ヴァシレンコはあえて周恩来に三峡ダムについて厳しい意見を呈した。そこには、三峡ダムに消極的なソ連側の姿勢がうかがえよう。それゆえ、ヴァシレンコは同じ立場の李鋭に自らの見解を語り、李鋭もまた最高指導層への書簡にソ連人専門家の動きや見解を盛り込むことによって、自らの見解の正当性を示したのである。

第四節　毛沢東の詩文「水調歌頭・遊泳」の役割

三峡ダムをめぐって両部門がしのぎを削っていた時期に、毛沢東は武漢で「水調歌頭・長江」という詩を詠んだ。一九五六年六月三日に詠まれたこの詩は、翌年一月に若干の修正とともにタイトルも「水調歌頭・遊泳」に変更し『詩刊』創刊号で発表された[56]。

林一山は、この毛沢東の詩が「流れに棹さす役割を果たし、全国で初めて『三峡熱』を巻き起こした」と述べている[57]。この詩の終わり五フレーズが三峡ダムの実現を想像したものであると解釈され、とくに「高峡出平湖」は、毛沢東がその実現を渇望したとの主張に恰好の論拠として、必ずと言っていいほど引用された。それは林一山ら三峡ダムの推進派に限ったことではなく、中国のメディア全般においてみられる現象である。

では、この詩はいかにして詠まれたのか。

五六年五月末、毛沢東は温暖な広州に滞在中、長江で遊泳したいと衛士長李銀橋に準備を命じた。羅瑞卿、汪東興、王任重などが反対したが、毛沢東に押し切られ、警衛隊一中隊長韓慶余を武漢に派遣し調査を行うことになった。韓隊長も毛沢東の長江遊泳に反対であったが、武漢に赴き船工から情報収集し、長江での遊泳が危険との結論をもち帰った。案の定、その報告は毛沢東の逆鱗に触れた。韓隊長は実際に長江を泳いでおらず、それでなぜ危険性を判断できるのか、というのが理由である。羅瑞卿らが妥協し、再度、副衛士長孫勇を武漢に派遣した。孫勇は王任重の協力を得て、人員を集め実際長江を泳いで水中の安全を確かめた。水中は安全であり、問題はないとする孫勇の結論をうけ、王任重は武漢で毛沢東の遊泳に備え手筈を整えた。三〇日、毛沢東は広州を出発し武漢に辿りつく前に、湘江でも泳いでいる[58]。

翌日早朝、武漢に到着した毛沢東は三時間にわたって施工中の武漢長江大橋を視察した。これはソ連の援助に

より長江にかかる初めての大橋であった。午後、毛沢東は長江を武昌漢陽門あたりから入水し漢口まで、二時間三分にわたり一五キロメートル泳いだ。実は、毛沢東は六六年七月までに一八回も長江を泳いだが、これがその初回である。毛沢東は六月四日に武漢を去る前にさらに二回、二日と三日にも長江での遊泳を楽しんだ。

二日には長江武漢大橋二号と三号の橋脚間を泳いで通った[59]。このあたりは水流が激しくもっとも危険な場所であるため、スリル満点であった。三日にもなると、厳重な警備が敷かれた長江の物々しい雰囲気に、武漢市民は毛沢東が泳いでいることに気づいた。

王任重の日記によれば、その日は、両岸に数万の人々が「毛沢東万歳」と歓呼し毛沢東の泳ぎを見守った。毛沢東は約一時間泳ぎ、船にあがり手を振って「人民万歳」と応じた[60]。この時の毛沢東の高揚感は想像に難くない。そして、毛沢東の気分をよくしたと思われる出来事がこの日もう一つあった。それは充分な睡眠が得られたことである。毛沢東は王任重に、「昨晩九時間の睡眠が得られ、この数か月でもっともよく眠れた」と語っていた。

むろん、その日も毛沢東はよく働いた。午前中には武漢製鉄所の幹部から報告をうけ、午後には数万人が見守るなかの泳ぎを終え、工農業展覧館を視察した。夕食後は省委大ホールで楚劇（湖北省の伝統劇）を鑑賞した。その際にも、湖北省と武漢市から集まった一三〇〇名の幹部から熱烈の拍手でもって歓迎されている[61]。

毛沢東は精力的に動き、至って充実した一日を過ごしたその晩に、「水調歌頭・長江」を詠んだのである。

才飲長沙水、又食武昌魚。万里長江横渡、極目楚天舒。不管風吹浪打、勝似閑庭信歩、今日得寛余。子在川上曰：逝者如斯乎！

風檣動、亀蛇静、起宏図、一橋飛架、南北天塹変通途。更立西江石壁、截断巫山雲雨、高峡出平湖。神女応無恙、当驚世界殊。

毛沢東は「水調歌頭・長江」に、念願であった長江での遊泳が達成できた喜びとともに、国家建設が着々と進められていることへの自信や自負を長江武漢大橋と三峡ダムに託したと解釈できよう。

しかし、毛沢東の詩句は、現場で政策を推進する中堅幹部にとって、自らの政策正統性のアピールに絶好の材料となった[62]。林一山が五九年七月に完成した『長江流域規劃要点報告』総論のなかで、この詩を引用し、「わが人民の偉大な領袖毛沢東同志が未来の三峡水利枢紐について謳いあげており、この詩句は偉大な河川の中心となるプロジェクトの見通しを示した」と述べた[63]。正式の報告書にもかかわらず、林一山が毛沢東の詩句を抒情的に引用した意図は明らかであろう。

また、林一山は繰り返しこの詩の発表前後に毛沢東と三回目の会見を行ったとしている[64]。前述したように、この詩が詠まれたのは五六年六月三日で、公表は翌年一月であった。毛沢東がこの二年間に武漢に滞在したのはそれぞれ一回のみであり、林一山と会見した記録は見当たらない。また、林一山はその際に武漢大学校長李達らも同席していたと回顧していることから、毛沢東と林一山の三回目の会見は、おそらく五八年四月八日のことである。実は、毛沢東はこの日、武漢地域の科学界五三〇〇名の代表と接見しており、李達も含まれていた。詩の創作前後はもちろん、その翌年にも林一山と毛沢東の接触がなかったことは明らかである[65]。

とはいえ、林一山にとって、この詩は非常に重要な意味をもち、政策論争相手への牽制と三峡ダムの宣伝に絶好の材料となった。まさに林一山自身が認めたように、この詩は三峡ダムを推進する勢いに棹をさす役割を果たしたのである。

おわりに

本稿は、長江大洪水をうけてソ連人専門家が招聘され、長江流域の総合開発ビジョンの策定が開始されるなかで、三峡ダム計画をその中心に据えるか否かをめぐる長委会と水電総局の攻防を明らかにした。

具体的には、長委会にとって、大洪水を契機に始まった長江の総合開発ビジョンの策定は、かねて進める三峡ダム計画を国家プロジェクトとして起動させる絶好の機会であった。長委会主任林一山はソ連人専門家に対しても、三峡ダム計画が最高指導層の指示であるとプレッシャーをかけている。これに対し、水電総局は、長委会の三峡ダム計画への前のめりの姿勢を批判し、総合開発ビジョンの策定に専念すべきであると牽制した。同時に、長江流域の治水と開発の重要性から、従来通り黄河流域に代表される水利と水電両部門の協力体制を踏襲するよう主張し、自部門の関与を求めた。

別稿で詳述するように、三峡ダム計画は一九五八年一月の南寧会議を経て紆余曲折のプロセスに入ったが、本稿で扱った五四年から五七年までの約三年間において、三峡ダム計画の滑り出しは順調であった。政策が前進した要素として以下の三点が考えられよう。

第一に、推進と反対の攻防が水利と水電の両部門という限られた空間で行われたことである。李鋭が五六年一月に初めて公の場で自らの意見を示したが、それは水利部長銭正英が出席する部門会議であった。翌月にソ連人専門家に同行した現地視察の場で、李鋭が率いる水電部門のメンバーと林一山らは正面衝突したが、水電部門の動きをうけて、林一山が自らの意見を明らかにしたのは、水利部門の機関誌上である。それに対して、李鋭は水電部門の機関誌で特集号を組み反論を行うも、『人民日報』への投稿は公での論争は望ましくないとする周恩来によって止められた。そして、長弁に派遣された他部門からの技術者たちは内部で議論することがあっても、論

争が世間一般に広がることはなかった[66]。

別稿で詳述するように、五八年以降少なくとも八〇年代半ばまでは、三峡ダム計画は水利と水電の両部門に加え多くの組織や研究者がかかわることになり、一種の「断片化」の様相を呈した。しかし、本稿で考察したこの時点では、三峡ダム計画をめぐる争いは両部門間に限られていた。このように閉鎖的な状況では、最高指導層の支持が大きな追い風となる構図が想像されよう。閉鎖的な空間では、政策推進者と最高指導層の意見が一致したときに政策が動き出すのである。

第二に、最高指導層の支持があったことである。「五四の長江大洪水の話が出るたび、みなは青くなって早急な（長江の）根本的治水を望んだ」と周恩来が後年発言しているように、長江大洪水によって最高指導層は危機管理意識を喚起された[67]。大洪水後ただちにソ連人専門家の招聘に着手したことはそれを物語っている。また、周恩来は林一山らとソ連人専門家の意見対立に際し、三峡ダムを長江流域開発の中心に据える林一山らの意見に賛同した。これは三峡ダムの推進派である林一山らを大いに勇気づけたことであろう。それゆえ、林一山は繰り返し三峡ダム計画が最高指導層の指示によるものであると強調し、その正当性をアピールした。他方、異議を申し立てる李鋭のアプローチが挫折した背景に、周恩来をはじめとする最高指導層の意向と、それを察知した李鋭の上司らの迎合があったことが推測できよう。

本稿では周恩来の三峡ダムへの姿勢が明らかになったが、毛沢東のかかわりについては五四年一一月の林一山への聴取以外は知りえなかった。しかし、彼が詠んだ「高峡出平湖」の詩文は中国で「三峡熱」を巻き起こし、林一山らにとっては政策論争相手への牽制と絶好の宣伝材料となり、三峡ダムを推進する勢いをいや増したことは間違いない。

第三に、ソ連人専門家の政策決定における影響力が限られたことである。五五年夏ごろから長弁に派遣された

ソ連人専門家は、武漢での約五年間の滞在中、夏には必ず中国有数の避暑地である廬山で過ごした。[68] このような特別な待遇とは裏腹に、彼らの長江流域の開発や三峡ダムに関する構想や意見は林一山らと最高指導層にうけ入れられたわけではなかった。前述したように、「もし三峡ダムで問題が生じたら、長江は収拾がつかなくなるであろう」とのソ連側の厳しい見解も周恩来らに影響を与えなかった。

とはいえ、現場におけるソ連人専門家の影響力の大きさは否定できない。例えば、長弁の李鎮南は長江流域総合開発ビジョン策定の段取りにおいて、ソ連人専門家から枠組みを示す要点報告の作成を助言された。同時に、別稿で詳述したように、水電部門の張鉄錚の大型ダム志向はソ連人専門家の影響によるものであった。[69] また、繰り返し中央最高指導層に対して異議を唱えた李鋭にとって、ソ連人専門家が語った見解はある種、「理論武装」の材料になったものと思われる。

「付記」本研究は、平成二八年度慶應義塾学事振興資金の援助をうけた。ここに記して感謝の意を表したい。

（1）拙稿「中国建国初期の水力発電部門と三峡ダム計画」慶應義塾大学法学研究会『法学研究』第八九巻第一二号、二〇一六年一二月。

（2）林一山「関於長江流域規劃若干問題的商討（上）」『中国水利』一九五六年第五期。同じタイトルの論文が林一山の論文集に所収されているが、この文言はない。楊世華主編『林一山治水文選』二五四～二八六頁、新華出版社、一九九二年。

（3）"The Three Gorges Dam Project", Kenneth G. Lieberthal and Michel Oksenberg: *Policy-Making in China: Leaders, Structures and Processes*, Princeton: Princeton University Press, 1988, pp.292–297.

（4）「三峡工程研究経過」長江水利委員会編『三峡工程技術研究概論』一九頁、湖北科学技術出版社、一九九七年。

（5）『中国三峡建設年鑑一九九四年』二六三頁、中国三峡出版社、一九九五年。
（6）陳夕「一五六項工程与中国工業的現代化」『党的文献』一九九九年第五期。
（7）「中国政府請蘇聯政府増加設計和幇助建設某些企業的備忘録一九五四年一〇月一二日」『党的文献』一九九九年第五期。

実は、ソ連への技術者派遣の要請時期について記述が分かれている。これが一九五四年一一月二六日の毛沢東らと林一山の会見後に出されたとする文献は以下の通りである。中共中央文献研究室編『周恩来年譜一九四九～一九七六年』上巻、四二七～四二八頁、中央文献出版社、一九九七年。前掲、『中国三峡建設年鑑一九九四年』二六三頁、前掲、『三峡工程技術研究概論』二〇頁、林一山「一次難忘的旅途談話」『林一山治水文選』一三頁、新華出版社、一九九二年。林一山「毛沢東胸中的長江」中共湖北省委党史資料徴編委員会編『毛沢東在湖北』八七頁、中央党史出版社、一九九三年。魏廷琤「長江三峡工程的決策」高永中主編『中国共産党口述史料叢書』第二巻、二四頁、中共党史出版社、二〇一三年。

一方、周恩来は洪水後、ジュネーブから帰国し、ただちにソ連閣僚会議議長に要請したとする記述もある。曹応旺著『周恩来与治水』三五頁、中央文献出版社、一九九一年。林一山主編『高峡出平湖―長江三峡工程』三八～三九頁、中国青年出版社、一九九四年。

（8）瀋志華『蘇聯専家在中国一九四八～一九六〇年』一四三頁、新華出版社、二〇〇九年。実際、長委会に到着したのは一二人であった。

（9）中共中央文献研究室編『毛沢東年譜一九四九～一九七六年』第二巻、三一六頁、中央文献出版社、二〇一三年。前掲、『周恩来年譜』上巻、四二七～四二八頁。中共中央文献研究室編『劉少奇年譜一八九八～一九六九年』下巻、三二八頁、中央文献出版社、一九九六年。

または、袁小榮編著『毛沢東外出和巡視記事一九四九～一九七六年』上、一八五～一八九頁、大風出版社、二〇一〇年。本書は、林一山が一九五四年一一月二六日夕方七時ごろに毛沢東の列車に呼ばれ、翌日広水という場所で毛沢東との朝食後に降車したとしている。魏廷琤も毛沢東らが「一晩中林一山の報告を聞いた」としている。前掲、「長江三峡工程的決策」高永中主編『中国共産党口述史料叢書』第二巻、二四頁。しかし、林一山の回顧によれば、報告

は夜一〇時頃に終了し、武漢に戻る汽車がなかったために、そのまま留まり昔話に花を咲かせた。前掲、『高峡出平湖』三六頁。

『中国三峡建設年鑑一九九四年』をはじめとする公式資料と多くの出版物は、この会見を「一二月中旬」としているが、一二月中旬に最高指導者の三人がそろって南下した記録はない。この会見を「一二月中旬」としたのは、林一山の回顧を検証なしに引用したためであると思われる。というのも、林一山は二〇〇四年に出版した自伝のなかで、初めてそれが「おそらく一一月のある晩」としたが、それまでの記述は「一二月中旬」としていた。『林一山回憶録』一六三頁、方志出版社、二〇〇四年。林一山「京漢線上向毛主席滙報三峡水利建設問題」『中国水利』一九八三年第六期、前掲、『高峡出平湖』二六〜二七、三六頁。

(10) 薄一波は、一九五四年一〇月の一か月間にわたって毛沢東、劉少奇、周恩来が広州で修正後の第一次五か年計画の草案を審議したとしている。薄一波『若干重大決策与事件的回顧』上巻、二八八頁、中共中央党校出版社、一九九三年。前掲、『毛沢東年譜』第二巻、三一二頁によると、毛沢東は一〇月三一日に北京を出発していたが、湖北武漢と広東韶関で数日逗留したため、広州入りしたのは一一月三日であった。

(11) 前掲、『高峡出平湖』三六頁。

(12) 前掲、林一山「京漢線上向毛主席滙報三峡水利建設問題」。林一山のほかの文章もこれについて必ず言及するが、その書類がソ連閣僚会議からのものであるとの明記はない。この返答が一九五四年一二月末に到着したとする文献もある。前掲、『周恩来与治水』三六頁。

(13) 中華人民共和国水利部弁公庁編『新中国水利（水電）系統組織沿革（一九四九〜二〇〇〇年）』七七頁、中国水利水電出版社、二〇〇三年。実は、水力発電部門の資料では、長弁が一九五五年四月の成立となっている。長委会はソ連専門家の到着を控え、この時期に他組織からの派遣人員とともに動き出したものと思われる。中華人民共和国電力工業史叢書『中国水力発電史一九〇四〜二〇〇〇年』第一冊、九一頁、中国電力出版社、二〇〇五年。または、中国水力発電年鑑編輯委員会『中国水力発電年鑑一九四九〜一九八三年』一一〇二〜一一〇三頁、水力発電雑誌社、一九八四年。

(14) 拙稿「中国三峡ダム計画の登場―毛沢東の示唆と林一山の役割」慶應義塾大学法学研究会『法学研究』第八九巻

第九号、二〇一六年九月。

(15) 前掲、『中国水力発電史一九〇四～二〇〇〇年』第一冊、九一頁。または、前掲、『中国水力発電年鑑一九四九～一九八三年』一一〇二～一一〇三頁。ここでは原文が「燃料工業部」となっているが、正しくは「電力工業部」。というのも、一九五五年七月三〇日、燃料工業部が石炭工業部、電力工業部と石油工業部に分割された。

(16) 前掲、『新中国水利（水電）系統組織沿革（一九四九～二〇〇〇年）』七七頁。

(17) 前掲、『中国水力発電史一九〇四～二〇〇〇年』第一冊、九二頁。林一山が李葆華を訪れた二、三か月後にソ連人専門家が到着したとの記述もある。林一山「震撼歴史的抉択」、「一次難忘的旅途談話」湖北省政協文史資料委員会、宜昌市政協学習文史委員会編『三峡文史博覧』四一、一二〇頁、中国文史出版社、一九九七年。

(18) 同右、『中国水力発電史一九〇四～二〇〇〇年』第一冊、九二頁。

(19) 前掲、『林一山回憶録』一九〇頁。

(20) 李鎮南『治江側記』九四頁、中国水利水電出版社、一九九七年。

(21) 同右、『治江側記』一〇四頁。前掲、『中国水力発電史一九〇四～二〇〇〇年』第一冊、九二頁。

(22) 同右、『治江側記』一〇五頁。

(23) 同右、『治江側記』一〇五頁。

(24) 同右、『治江側記』八〇、一〇五頁。

(25) 同右、『治江側記』一〇五頁。

(26) 前掲、『中国水力発電年鑑一九四九～一九八三年』二六三頁。

(27) 中共中央文献研究室編『周恩来経済文選』一八九頁、中央文献出版社、一九九三年。

(28) 前掲、『三峡工程技術研究概論』二〇頁。

(29) 前掲、『毛沢東年譜』第二巻、四八〇頁。この会議に周恩来、劉少奇、陳雲、彭真、李富春、薄一波などが出席したと記されている。前掲、『周恩来年譜』上巻、五二七～五二八頁と、中共中央文献研究室編『陳雲年譜一九四九～一九五八年』中巻（修訂版）四一六頁、中央文献出版社、二〇一五年。この二冊の年譜に李葆華が出席した記述があるが、前掲、『劉少奇年譜』下巻、三四八頁には記述はない。

（30）同右、『周恩来年譜』五三九頁。

（31）この論文が「五六年二月に発表された」とする記述もある。前掲、『高峡出平湖』四〇頁。しかし、『中国水利』第五期に、「一九五六年四月一六日」付けの水利部副部長周駿鳴のスピーチ原稿が掲載されている。林一山論文は二月の現地視察後に書かれ、四月以降に発表されたと考えられよう。

（32）『中国水利』一九五六年第五期。

（33）李鋭（電力工業部部長助理兼水力発電建設総局局長）「関於長江流域規劃的幾個的問題」『水力発電』一九五六年九月号。

（34）同右、李鋭「関於長江流域規劃的幾個問題」。一九八〇年以降の回顧では、李鋭は「五〇〇字」としている。

（35）前掲、『治水側記』三五～三六頁。

（36）李鋭の昇進に関して、燃料工業部の分割に伴い、水力発電総局は劉瀾波が部長とする電力工業部の管轄下におかれ、李鋭は部長助理になった。前掲、『中国水力発電史一九〇四～二〇〇〇年』第一冊、一四〇頁。

（37）李鋭（電力工業部部長助理）「関於水力資源普査和河流綜合利用問題―在全国水力、水利資源普査会議上的講話」『水力発電』一九五六年三月号。

（38）来華の目的について、次の異なる記述がある。「長江の状況を調査し、必要に応じて新たな援助を決定するため」である。「蘇聯政府又派両位専家来我国了解長江情況」『人民長江』一九五六年三月号、四四頁。

一方、長江に派遣されたソ連専門家の仕事を検査するためであるとする見解もある。前掲、『中国水力発電史一九〇四～二〇〇〇年』第一冊、九四頁。本文第三節で述べた李鋭の書簡の内容から一行の目的は後者であると判明できる。李鋭「関於長江三峡問題的意見」『李鋭文集―論三峡工程』第一一巻、一三九頁、中国社会科学出版社・深圳香港社会科学教育出版社、二〇〇九年。

（39）李鋭「関於長江規劃的幾個問題」同右、『李鋭文集』第一一巻、一二四～一三一頁。これは李鋭の発言全文である。または、同右、『中国水力発電史一九〇四～二〇〇〇年』第一冊、九四頁。前掲、『中国水力発電年鑑一九四九～一九八三年』二六三頁。

（40）前掲、「蘇聯政府又派両位専家来我国了解長江情況」『人民長江』一九五六年三月号、四四頁。この視察は一一日

まで行われたとする文献もある。「査勘三峡後的幾点意見」前掲、『李鋭文集』第一一巻、一三二頁。

(41) 李鋭『李鋭往事雑憶』二六一頁、江蘇人民出版社、一九九五年。

(42) 筆者は、この現地視察が存在しなかったものか、あるいは李鋭の記憶違いかと疑ったほどである。

(43) 前掲、「査勘三峡後的幾点意見」『李鋭文集』第一一巻、一三二～一三六頁。総括が行われたのは一七日とする文献もある。李鋭『「大躍進」親歴記』四頁、上海遠東出版社、一九九五年。

(44) 前掲、李鋭「関於長江流域規劃的幾個問題」『李鋭文集』第二巻、一二四～一三一頁。

(45) 民国時代三峡ダム計画の推進に大きな役割を果たした張光闘は、水電総局から清華大学に移籍したが、教授職の傍ら水電総局設計総院総工程師を兼任していた。彼は李鋭から林一山に反論する原稿を書くように頼まれたが断ったと回顧している。張光闘『我的人生之道』六五頁、清華大学出版社、二〇〇二年。

(46) 大連工学院水能利用教研室主任陳可一「対長江流域規劃工作歩驟的一点意見」『水力発電』一九五六年一一月号。本刊通訊員孫懐驁「対三峡工程『囲埝発電』方案的一点意見」『水力発電』一九五六年一二月。本刊特約通訊員李彦碩「我們在『長江流域規劃』座談会上談到的幾個問題」『水力発電』一九五七年一月号。「成都工学院座談長江流域規劃問題発言摘要」『水力発電』一九五七年二月号、など。

(47) 李鋭「克服主観主義才能做好長江規劃工作」『水力発電』一九五六年一一月号。

(48) 李鋭は南寧会議から帰京した数日後の二五日に、部長劉瀾波、王林と部党組のメンバー宛に会議に提出した報告書を出したが、それとともに短い書簡を書いた。その中で、「この報告書の作成にあたって、大まかな考え方は中央の一部の同志（李、薄副総理など）の支持を得ている」と述べた。中国水力発電史料徴集編輯委員会『中国水力発電史料選編』（内部発行）三二頁、一九九七年。

(49) 前掲、『「大躍進」親歴記』五頁。

(50) 前掲、『周恩来与治水』二四四頁。

(51) 同右、『周恩来与治水』三七頁。

(52) 「我与水電」『李鋭口述往事』三〇七頁、大山文化出版社、二〇一四年。

(53) 前掲、拙稿「中国建国初期の水力発電部門と三峡ダム計画」。

(54) 前掲、『「大躍進」親歴記』四～五頁。
(55) 前掲、「関於長江三峡問題的意見」『李鋭文集』第一一巻、一三九頁。
(56) 中央档案館編『毛沢東手書選集』第一巻『自作詩詞』一七一～一七六頁、北京出版社、一九九三年。一七五～一七六頁にあるのは「水調歌頭・長江」の原本である。一七一～一七四頁にあるのは、一九五六年一二月一日に清書したもので、「水調歌頭・遊泳」となっている。
(57) 前掲、『林一山回憶録』一六八頁。
(58) 王任重「毛沢東第一次在武漢遊長江」前掲、『毛沢東在湖北』六～九頁。また、孫勇『在毛主席身辺二〇年』一六〇～一七四頁、中央文献出版社、二〇一二年。章重『東湖情深―毛沢東与王任重一三年的交往』七三～九五頁、中共党史出版社、二〇〇四年。『張耀祠回憶録―在毛主席身辺的日子』一四五～一五八頁、中共党史出版社、二〇〇八年。張耀祠は新聞報道を元にまとめた毛沢東の長江遊泳回数は一三回で、また一九五六年六月一日に毛沢東は泳いだとしているが、上記の書籍および中共中央文献研究室編『毛沢東年譜（一九四九～一九七六年）』第三～六巻（中央文献出版社、二〇一三年）から、その回数は一八回で、また六月一日には毛沢東は泳がなかったと思われる。
そして、毛沢東が「水調歌頭・長江」を詠んだのは一九五五年とする下記文献の記述は間違いである。侯波「最幸福的回憶」『難忘的回憶―懐念毛沢東同志』二三〇～二三一頁、中国青年出版社、一九八五年。
(59) 徐華英「一橋飛架南北」同右、『毛沢東在湖北』一五九頁。
(60) 前掲、王任重「毛沢東第一次在武漢遊長江」『毛沢東在湖北』八頁。前掲、『在毛主席身辺二〇年』一七三頁。
(61) 同右、王任重「毛沢東第一次在武漢遊長江」『毛沢東在湖北』八頁。
(62) 林一山のみならず、長江武漢大橋を謳った「風檣動、亀蛇静、起宏図、一橋飛架、南北天塹変通途」のくだりは、武漢大橋の関係者も好んで引用している。前掲、徐華英「一橋飛架南北」『毛沢東在湖北』一五六～一六三頁。
(63) 前掲、『林一山治水文選』一六七頁。
(64) 前掲、『林一山回顧録』一五七～一六八頁。前掲、『高峡出平湖』四一頁。
(65) 「『水調歌頭・遊泳』が発表後の一九五六年夏に、林一山が毛沢東と会見した」との記述は、信憑性の高い雑誌でも散見するが、それはおそらく林一山の影響であると思われる。たとえば、「『長江王』林一山伝奇」『中国三峡建設』

二〇〇六年第四期。顧邁男「毛沢東和林一山談三峡水庫」『炎黄春秋』二〇〇八年第八期。

(66) 胡慎思（水利電力部中南勘測設計院）「三峡工程必須厳格按基建程序弁事」田方、林発棠、凌純錫主編『論三峡工程的宏観決策』一二二頁、湖南科学技術出版社、一九八七年。

(67) 「周恩来在三門峡現場会議上的総結発言（一九五八年四月二四日）」。曹応旺「老一輩革命家与三峡工程」『党的文献』一九九七年第二期。

(68) 前掲、『治水側記』九二～九三頁。

(69) 前掲、拙稿「中国建国初期の水力発電部門と三峡ダム計画」。